

あした計画 I

生活特報部 FAX 092 (711) 9056 メール seikatsu@nishinippon-np.jp

おなかの命は… 不妊症

◇5

妊娠はするものの、流産や死産を繰り返す不妊症。約20年前から研究を始め、岡山大学病院(岡山市)で専門外来を担当している医師の中塚幹也さんの話や厚生労働省研究班のデータを基に、検査や治療法について、あらためてQ&A方式でまとめてみました。

Q 不妊症という言葉はあまり聞いたことがなかったのですが。

A 3回以上連続して流産する「習慣流産」は昔からよく知られています。不妊症は、流産、死産、新生児死亡を2回以上繰り返した状態で、習慣流産より広い概念です。1人目は無事に生まれても、2人目、3人目で流産した場合は「続発性不妊症」として検査をする必要があります。

厚生労働省研究班の報告で、全国の不妊症治療の拠点施設



岡山大学病院で不妊症専門外来を担当する医師の中塚幹也さん。「情報を得られずに妊娠を諦めてしまう人をなくしたい」と話す

治療で8割以上が出産

設が集まって研究班をつくりました。それまでは検査や治療の指針がありませんでした。さまざまなデータが明らかになったため、11年に指針をまとめて全国の産婦人科に配布しました。ただ、まだ十分に浸透したとはいえ、2回以上の流産でも「運が悪かった」と医師から言われ、適切な検査や治療を受けられていない人もいます。

Q 流産はどのくらいの頻度で起きますか。

A 全妊娠の約15%に起こるとされ、35歳以上になると流産率は上昇します。

妊娠反応が陽性となった後、子宮に赤ちゃんの袋が確認される前に流産してしまう「生化学的妊娠」は含まれません。検査薬の感度が上がったことで確認されやすくなったのですが、よく起こるケースで神経質になる必要はありません。何度も繰り返す場合は医師に相談してみましょう。

十分な検討が必要です。子宮や胎盤の血流が悪く、胎児に栄養が届きにくい体質の場合は、低容量アスピリンの服用やヘパリンの自己注射で血栓を予防します。

Q 投薬による副作用や胎児への影響はないのでしょうか。

A 海外の疫学調査では、妊娠中のアスピリンと子の先天異常の因果関係は認められていません。ヘパリンは胎盤を通過しないため赤ちゃんには移行しません。軽い肝機能異常や出血が止まりにくくなる副作用

の可能性があるため、医師の診察を受けながら注射をする必要があります。

ご意見や感想をお寄せください。不妊症や流産の体験談も募集しています。郵送の場合は、住所、氏名(匿名可)、年齢、連絡先を書いて、〒810-8721(住所不要)、西日本新聞生活特報部「不妊症」取材班へ。メール、ファクスでも受け付けます。紙面で取り上げる際には個人が特定されないよう配慮いたします。

ことは、治療方針を決める上で役立ちますが、保険適用外となっています。

Q 専門医や相談窓口を知りたい。

A 厚生省のホームページには、全国の相談窓口のリストが掲載されています。厚生労働省研究班の不妊症専用サイトもあり、そこには専門医や治療の情報などが詳しく載っています。

不妊症は専門医が少なく、検査も不十分なため、本来治療が必要である人が見逃されたり、過剰な医療が行われたりしているのが現実です。保険適用外の検査や治療があり、患者の経済的負担も小さくありません。早急に改善する必要があります。

—おわり—
(この連載は新西ましまし、斉藤幸奈が担当しました)